



<市町村探訪>

地域の文化的資源を生かした「ウミウの里づくり」 (日立市)

はじめに

日立市は、県北東部に位置しており、東は太平洋、西に阿武隈山系が連なる豊かな自然に恵まれた都市です。

日立市は平成 16 年 11 月に北部の旧十王町と合併して現在の日立市となりましたが、旧十王町地域では、古くからウミウの捕獲が行われ、地域の文化として受け継がれてきました。

地域とウミウのつながり

当地域には利用率日本一を誇る「国民宿舎鵜の岬」をはじめ、日帰り温泉施設「鵜来来(うらら)の湯十王」や十王物産センター「鵜喜鵜喜(うきうき)」など、ウミウにちなんだ名称の施設も多くウミウとの深いつながりが感じられます。

ウミウは食用や徒歩鵜漁^{かちうりまう}に利用されていましたが、鉄道など交通機関が発達した大正時代以降は長良川をはじめとする各地へ鵜飼用に提供されるようになり、現在では全国 11 箇所の鵜飼地へウミウを提供する日本で唯一の地域となっています。

ウミウの捕獲と捕獲場の崩落

ウミウの捕獲場は国民宿舎鵜の岬東側の断崖にあります。

捕獲方法は鳥屋の外の岩場におとりのウミウを置き、休憩のために岩場にとまったウミウの足にかぎ状の棒を引っ掛けて捕らえます。

捕獲場はかつて 5 箇所ありましたが風雨や海食により次々に崩落し昭和 50 年代には 1 箇所になってしまいました。あわせて捕獲者も減少し、長い間 1 名のみという状態になっていました。

そして、唯一残っていた捕獲場も平成 15 年 6 月に岩盤ごと崩落し、ウミウの捕獲・供給ができなくなってしまいました。

このままでは、ウミウ捕獲という地域文化の継承のみならず全国の鵜飼事業の存続も危ぶまれることから、早急に捕獲場の再築が求められました。



再築された捕獲場(鳥屋)



鳥屋内部(右側外におとりのウミウがいる)



トンネル入口

捕獲場の再築

このため、茨城県と日立市、鵜飼実施自治体とで、ウミウの捕獲から鵜飼までを一連の文化としてとらえ、鵜飼の伝統文化を広く継承、継続していくために、捕獲場



の再築と維持管理，捕獲技術の継承及び後継者の育成によるウミウ捕獲継続性の確保を目的とした「ウミウ捕獲場再築及び捕獲技術保存協議会(現ウミウ捕獲技術保存協議会)」を平成16年2月に設立しました。

捕獲場の再築にあたっては，岩場を補強するとともに，自然環境の大幅な改変がウミウの飛来に影響を与えることも懸念されたため，新しい捕獲場へは新たにトンネルを整備してアクセスすることにしました。

費用面では，上記協議会メンバーからの負担金に加え，国土交通省の「まちづくり交付金」も活用しています。

新しい捕獲場は平成16年10月に完成し，同月からウミウの捕獲を再開することができました。

捕獲後継者の育成

捕獲後継者については，ウミウの捕獲が天候や期間(1年のうち6ヶ月(渡りを行う時期)しかできない)などの要因により不安定なため，なかなか担い手が見つかりませんでした。地元からの推薦により2名の後

継に数地内にブラダイにスからも証



捕獲したウミウを入れるかごは手づくり

捕獲場の活用と情報の発信

捕獲場再築後の新たな取り組みとして，休猟期間(7～9月，1～3月)に捕獲場及びトンネルを一般の方に公開しています。

トンネル入口には捕獲事業の説明板を設置するとともに，トンネル内部には鵜飼地を紹介するパネル展示を行い，見学者には捕獲者が説明を行っています。

捕獲場の公開は大変好評であり，平成20年の1年間には15,657人の見学者を迎えました。

また，捕獲事業をPRするDVDを作成して，「国民宿舎鵜の岬」と「鵜来来の湯十王」，「十王交流センター」において定期的な放映を行い情報の発信に努めています。

今後の取り組みの方向性

今後は，ウミウ捕獲という地域の伝統文化を発展・継承していくためのソフト面の更なる取り組みが求められています。

具体的には，昭和40年代に途絶え，現在，祭りのイベントとして再現している徒歩鵜飼の定期的な再現の検討や小中学生を対象にしたウミウ捕獲や鵜飼に関する講演や体験事業による意識啓発，ホームページによる鵜飼やウミウの捕獲状況などの情報発信や捕獲場見学ツアーの実施，鵜飼自治体との連携の強化などによる交流の促進などへの取り組みを検討しております。

これらの取り組みによりまして，更なる「ウミウの里づくり」を進めていきたいと考えています。

<お問い合わせ先>

日立市産業経済部観光振興課

TEL：0294-22-3111 内線406，407